

## 農薬開発について

国内の最近の農薬需要は、日本経済が高度成長から低成長時代へと移行してきた時とほぼ同じくして、今後、量的な面での拡大はあまり期待できない低成長の時代に入ったと思われる。具体的には、農薬の使用対象である農作物の栽培面積が、水稻に代表されるように減少の傾向にあり、その反面、果樹・野菜等の栽培面積はほぼ横ばいの傾向にある。わずかに、水田利用再編対策による麦・大豆などが、微増しているのが現状であろう。

一方、新農薬の開発には、莫大な開発費を必要としてきている。なかでも、安全性の評価には多くの時間と経費が必要とされている。

このような状況下で、今後の農薬開発の方向を考えてみて、端的にいうならば、もちろん国内も含めて国際的に太刀打ちできる“化合物”“需要の大小”“価格を含めた競争力”等の観点を特に明確にして進むべきであろう。

新剤の開発の難しさは、安全性評価以外にも種々の点より指摘されてはいるが、農薬分野は国際的な面では魅力ある分野であるし、まだまだ伸びていく産業であることは確実である。

日本の持っている技術力は、基礎研究の面でも応用研究の面でも高い水準に達しており、この技術力が一つの資源であると考え、食糧も含め、他に資源がない日本の立場として、この技術力にさらに磨きをかけ、諸外国との取引材料として育てていくことは、われわれに課せられた大変重要なことと思われる。

〔財団法人 日本植物調節剤研究協会理事 三井東圧化学株式会社精密化学品本部副部長 大池峯一〕

## 目 次 (第14巻第3号)

アメリカにおける残留農薬および環境汚染物質などの検査状況について…… 2  
＜厚生省国立衛生試験所 武田明治＞

中国の農業を視察して…………… 6  
＜北興化学工業株式会社 井上好之利＞

ミカンの摘果剤について…………… 11  
＜佐賀県果樹試験場 江原忠彰＞

昭和54年度常緑果樹関係除草剤・生育調節剤試験成績概要…………… 14  
＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

昭和54年度落葉果樹関係除草剤・生育調節剤試験成績概要…………… 23  
＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

昭和54年度リンゴ関係除草剤・生育調節剤試験成績概要…………… 28  
＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

### 新除草・調節剤

DPA・DCMU 除草剤 …………… 32

オキサジアゾン・ブタクロール 除草剤 …… 33

表紙の写真は、ケフシグロの種子表皮細胞を走査電子顕微鏡で撮影したもの、星状突起型、550倍。

〔写真提供者：笠原安夫氏〕